

平成 30 年度 第 1 回富田林市市民公益活動と協働のための市民会議録

実施日：平成 30 年 8 月 30 日（木）

場 所：市役所 庁議室

時 間：14：00～16：00

出席者：市民会議委員 7 名

傍聴者：0 名

《開会》多田市長より委員代表者に委嘱状の交付並びにあいさつ

《議長・副議長の選出》議長に久隆浩委員、副議長に岡室悠介委員が選出される。

久議長： 初めての会議ですので、順番に自己紹介をお願いします。

岡室副議長： 大阪大谷大学で法学などを教えています。いろいろな面で市民会議に貢献できればと考えています。

西尾委員： 富田林市町総代会の副会長をしています。町総代会は、市内 164 の町会・自治会で構成し、行政と地域のパイプ役として活発に活動している団体です。

谷川委員： NPO 法人ゲキトモエンターテイメントの代表をしています。私たちの NPO 法人は、きらめき創造館 Topic の運営業務を担っています。また、Topic を活気のある施設にするために、青少年委員会を設置し、イベントの企画や、コーディネートもしていて、今は、行列が出来る施設になっています。そういった経験を、この市民会議でも活かせたらなと考えています。

緒方委員： 大学を卒業後、都市開発の事業に携わってきました。一昨年の夏に地元に戻ってきて、平成 29 年度に自治会長をしました。自治会の実態は、コミュニティの衰退した都会の過疎地の状態でした。今年度に入って、自治会がコミュニティの再生の基盤となるべく、ボランティア倶楽部を立ち上げ、地域の活性化を目指しています。

寺田委員： NPO 法人きんきうえぶで市民公益活動支援センターの業務を受託し、高齢者支援や金剛地区のまちづくりの活動を行っています。

丹下委員： 富田林市社会福祉協議会の職員です。日々、地域福祉やまちづくりを推

進する中で、協働の重要性を感じています。日ごろの業務で感じたことをこの市民会議で伝えられたらと思います。

久議長：       さまざまな地域での協働の取り組みを応援しています。支援センターや地域福祉の支援も含め、地域のみなさんとの協働取り組みを進めています。元気なまちづくりモデル事業では、彼方上地区に関わりながら、地域をより良くする活動にも参加しています。また、NPO 法人市民事務局かわにしとして川西市の市民活動センターの指定管理を受け、さまざまな団体の中間支援をしていますので、そのような経験もお伝えできたらと思います。

事務局：       「富田林市における市民公益活動推進の経過及び市民会議について」説明

西尾委員：     昔、私が見に行ったことがある箕面市の市民公益活動支援センター（ショッピングモールの中の空き店舗を活用）と比べると、さまざまな団体の活動の拠点となるには、決して富田林の支援センターが悪いという訳ではなく、もう少し広い場所が必要だと思います。市の財政も大変かと思いますが、もう少し広い場所を確保できるように考えてほしいです。

久議長：       市民公益活動支援センターというのは大きく二つの役割があると思います。一つは、会議やいろいろな交流をするスペースとしての役割、もう一つは市民活動団体を応援するという機能としての役割があると思います。富田林市の場合は、後者の方を重要視していると思います。〇〇市が、市民活動コーナーという形で機能面を重視しています。支援センターが、総合福祉会館の中にあるので、スペースとしてのセンター的な役割は、社会福祉協議会が運営している総合福祉支援センターの中にあるスペースを利用できるようになっています。現在、きんきうえぶさんに委託するようになって、スペースとしてのセンターと、機能としてのセンターが少し切り分けられていると思いますので、寺田委員の方から補足説明していただいたらと思います。

寺田委員：     自分たちの事務所が広ければ、スペースとしても使えるのでいいと思いますが、現在の予算で、もう少し広いスペースを借りるのは難しい状況です。そのため、公的機関や民間の店舗に協力していただき、富田林市内のいろいろな所に無料で使えるスペースを作っています。今後、このスペースを増やすことにより、いろいろな地域の人が利用できるようにしていければ、もっと使いやすい場所になるのではと考えています。

久議長： 西尾委員からご提案いただいたものが実現すると一番理想的ではありますが、費用もかなりかかってきます。そういった場合にどのようにしていけるかという、一つの新しいモデルを富田林市が提供してくださっているのかなと思います。先ほど、谷川委員の方から Topic の運營業務を委託されているという話がありましたが、実際に業務をしていて感じたことがあれば教えてください。

谷川委員： Topic は、たくさんの部屋がある施設ではないので、逆に利用者が多すぎて施設に入れられない問題が起きています。特に駐輪場が足りません。Topic は、学生や若者をターゲットにした施設なので、夕方から夜や週末に関しては 8 割ぐらいの稼働率で、公共施設としては高い稼働率となっています。まだオープンして 1 年目なので、今後どのようにして活用していくかということをお悩み手探りしながらやっています。

久議長： 市全体としても、公共施設をどのように有効活用するかということについて計画を策定し、検討しています。今までは、福祉センターや青少年センターなどの施設を、それぞれ個別に作ってきました。先ほどの谷川委員の意見にもあるように、学生を対象とした施設だと平日の昼間の利用率が低くなってしまいますので、もう少し効果的に施設を使えないかという点について、今後、協働という観点からも検討していければと思います。

ちなみに、先日指定管理者の全体の評価をさせていただいた時、じないまち交流館の 2 階の集会室の稼働率が良くないとの話がありました。もっと PR をすれば、集会室を使用する市民活動団体も出てくると思うので、まずは市民公益活動支援センターに情報提供してみてもと提案しました。

西尾委員： じないまち交流館は、新しい施設で 2 階建てなのに階段しかないため、車いすで 2 階に行くことが出来ません。

久議長： その辺りはまた工夫が必要だと思いますし、PR もまだ行き届いてないと思います。今後、空いている施設を活用していくためには、市民公益活動支援センターの情報集約・発信が核となると思います。

事務局： 「第 3 期富田林市元気なまちづくりモデル事業について」説明

久議長： 元気なまちづくりモデル事業を創設した経過については、金銭的な支援だけではなく、地域課題を自ら解決するために、さまざまな団体がつながって

いくと、それなりの力が発揮できるということで、複数団体が連携をとるための一つのきっかけとなるのが事業の主旨にあります。

今、全国的にも小学校区単位でまちづくり協議会を設立していくことが進んでいます。富田林市も将来的には、小学校区単位で自治会、町会を中心にさまざまな NPO 団体がつながりながら、地域課題を自ら解決できる力をこの事業を通してつけられることを目指しています。

緒方委員： 私は、助け合い支え合いはコミュニティのベースになり、コミュニティを構成する多世代の人たちが、お互いの立場で助け合い支えあっていくためのベースを作っていくきっかけになればとの思いで、楽農クラブを立ち上げました。これからの地域をどうするかという課題の中で、全国各地で、地域自治組織や地域自治システムということで取り組みが始められていますが、全国どこでも地域や行政の問題点や課題、システムも同じで、真ん中の核となる組織が見えないと思います。そこを、地域自治組織である自治会がしっかりしていかないといけないと思います。ただ今の自治会のシステムそのものが非常に形骸化してしまっているので、これを何とか活性化し、改革して地域の人に信頼できる活動にもっていかなければいけないと思います。

今までも、自治会が大事だと思っていた人はたくさんいたはずで、そういう人たちが自治会をサポートするシステムが、自治会ボランティアシステムです。地域のお互いの支えあいや安心できるまちづくりなど、今まで自治会でやるべきだと言っていてやれなかったところをサポートしようという組織を作って活動を始めています。これからもっと自治会や地縁団体を支援して、今まで形骸化した活動を本来の活動に戻すとともに、活性化していくことによって、地域自治システムを構築しやすくなると思います。

久議長： 先ほどの緒方委員の話の延長上で言いますと、今宝塚市に協働まちづくり促進委員会というのがあり、約 30 名の委員の内、3 分の 2 が自治会やまちづくり協議会の役員経験者で構成されています。宝塚市では、まちづくり協議会の立ち上げから 20 年以上経過したこともあり、この数年間、まちづくり協議会の活動を見直すために、徹底的に議論し、ガイドラインを作成しました。その中でチェックリストを作成し、「自発的な活動をうまく協議会の活動に取り込めるような仕組みが協議会で出来ていますか。」と「会議で自分の意見が本音で語られる会議になっていますか。」の 2 点を特に重要なポイントとしています。例えば、もうすでに役員さんで案を練られ、それを提案されて承認をしていく会議になっている場合が多いので、白紙の状態からみんなで組み立てていけるような会議になったら、みんなが意見を言い合える雰囲気が出

てくるんですが、そういうような会議になっていますかというようなチェックリストになっています。

彼方上地区では、カレンダーづくりやかかしフェスティバル、写真展などのイベントは、「〇〇の活動をしたい。」と、手を挙げた人を中心に回す活動がどんどん増えていて、地域活動の雰囲気が変わってきています。

また、〇〇市では、ワークショップの時に防災の話題が出ました。その時に、男性と女性の意見が真っ二つに分かれました。これだけ災害が増えている中で、どうやって地域の防災力を高めていくのかという議論になり、男性は、ほとんどの人が自主防災組織として組織を強化しようという話になります。しかし、女性は友達をたくさん作って、友達同士で声かけあって、つながりの中で解決したらいいんじゃないかという話になります。組織を強化して解決するという立場と仲間作りでうまくお互いに支えあうシステムでいこうというのと両論あります。これをどのようにしていくのかという問題も、非常に今後の地域づくりを考えていく上ではとても重要な話ではないかなと思います。

緒方委員： 私たちの自治会でも、約20年前に自主防災組織ができましたが、高齢化している中で自主防災組織の運営ができないということで、次の自治会長の時に廃止になりました。そのような経過の中、自治会ボランティアクラブでは、地域の高齢者を見回る、なんでも相談プロジェクトを始めました。災害時の支援は、隣近所の顔の見える関係でなければいけないので、お互いに顔の見える関係でサポートしていきましょうという活動です。市民活動と私たちの活動をどうやって結び付けていくかが重要で、なんでも相談をとおして、貴重な市民活動をされているグループや地域包括支援センターなどにコーディネートして紹介するというような取り組みなので、我々のやっている自治会活動は、いわば一番底辺のところをやっています。

久議長： 〇〇市のまちづくり協議会の〇〇会長は、防災や環境美化や福祉などの分野別の活動はもうできるだけ分けてやらずに、楽しい行事を残しながらやっていきましょうという方針で取り組まれています。どんな行事も企画運営をしないといけないので、そこの中で人が育っていく。楽しい行事だといろいろな人たちが参加するので、そこで人のつながりも出来上がってくる。人が育ち人のつながりが出来上がってくるとさまざまな問題に対して対応できる地域になるという発想に切り替えています。また、谷川委員のグループには若い力が結集しているので、集まった若い力を地域活動へうまくつなげられる仕掛けができれば面白いと思います。若い人たちは若い人たちなりにいる

いろな考えやアイデアを持っているので、それをうまく地域につなげていくのは、寺田委員の市民公益活動支援センターの役割でもあるかなと思います。

緒方委員： 私たちの自治会でも、若い人たちを自治会活動の中に呼び込むために、いろいろと考えて活動しています。今度の日曜日には、屋根付車庫でガレージサロンをして、餃子パーティーをしようということでPRしたら、開催する前からかなり噂になってしまうほど盛り上がっているのですが、ベースには自治会の存在があることを理解していただいています。

谷川委員： 先日 Topic で、青少年がカレーを作って地域の人におもてなしするという、イベントを開催したら大盛況でした。青少年と地域の人と一緒にご飯を食べるという楽しい雰囲気があったのは、Topic という若者が常にいる場所があったからだと思います。Topic にも、いろいろな地域からたくさんの青少年が集まっているので、どの地域にも決して若者がいないわけではないと思います。そんなに大きくなくてもいいので、若者が常に集まることができ、そこで地域の若者に声をかけることができる場所があれば、いろいろな地域がもっと元気になるんじゃないかなと思います。

西尾委員： 私も、小学校単位のまちづくり協議会の必要性を感じています。私たちの町総代会の理事会でも話題になるのですが、どこの町会・自治会もだいたい70・80代の人为主体で活動していて、50・60代の人非常に少ないという状況です。自主防災会も、災害があった時には支援を必要とする人が自主防災会の役員をしているような状況があります。他の地域では、どのように取り組まれているか教えていただきたい。

久議長： 昨年、〇〇市での会議で若い人がどうやったら地域活動に関わっていけるのかというテーマで議論をしました。その中で、子育て中の女性の方が、「上の子どもの時にはPTA活動にかかわったが、下の子どもの時にはPTAの役員をなかなか引き受けようと思わなかった。」と話されました。その理由は、会議の回数が多く、また会議の時間が仕事の時間と重なってしまっ出席できない。だから、若い現役世代が無関心ではなくて、関わりたいけれどもペースが合わないというところがあるんじゃないかと思います。そういう人々は、もう少し自由に動けるような部分を作ることによって、いろいろな形で参画できるように思います。また、すべてのことをお任せするのではなく、ここはこういう人にお任せをしようよということができれば、そこで活躍してくれるんじゃないかと思っています。うまく役割分担できれば、少しずつ

みんながいろいろな形で参画できるようになってくると思います。

寺田委員： 今のお話でいうと、緒方委員も参画されている金剛のまちづくり会議は、月1回平日の夜19時30分から開催することで、地元の商店の人や大阪市内で勤務されている人も参加できるように設定しています。また、先ほど久議長の話にもありましたが、会議を開催する時の日程や時間は世代的には大事になってくるところだと思えます。あと、会議の日程調整は、一人ひとり電話して確認するのではなく、LINEのグループなど、みんなが気軽に連絡を取りあえる体制が必要です。特に働いている世代にとっては、平日の日中は電話にも出られないので、そういう体制づくりも大事かなと思えます。

緒方委員： 私は金剛地区に住んでいますが、歴史文化的な資源が何もありません。また、府下でも富田林市は人口減少率が高い状況です。だから、金剛地区だけを再生しても市全体の人口が減少しているのもっと寺内町と金剛地区などお互いが連携するようなシステムを作って交流していかないと地域が活性化しないと思うし、その仕掛けを我々が仕込んでいかないといけないと思っています。

谷川委員： 金剛地区からTopicに通っている若者もたくさんいます。その若者は、「金剛地区にもこういう場所がほしい。」「自主勉強ができる場所がほしい。」といつもいいながら毎日Topicに通っています。そんなに大きなくても、若者が集えるようなスペースが金剛地区にあれば、自然と金剛地区のたくさんの若者が集うと思えます。

西尾委員： 金剛公民館でも学習スペースを作っていて、毎日20から30人の若者が来ています。Topicだけでなく公民館でもそういう取り組みをしているという情報が広がっていけばいいなと思えます。

緒方委員： 自由に楽しく使える場所が必要だと思えます。国の公園に関する規制が緩和され、公園を舞台とした地域コミュニティの再生が取り組まれています。先ほど谷川委員の話にあった、若者が寄ってくる施設がどういう施設なのか分からないので、勉強しながらまちづくりにいかせたらと思えます。

事務局： あと、向陽台にある富田林市ケアセンター（けあばる）の1階にも、この会議室ぐらいの広さの学習ができるスペースがあります。

西尾委員： Topic やけあばる、金剛公民館などの自習ができて、若者が集まれるスペースがあるという事をもっと行政から PR した方がいいと思います。

緒方委員： スペースがあるハードに対して、ソフトをどう仕掛けていくかということが大事になってくると思います。

久議長： おそらく若い人たちには行政からの情報は届かないと思います。先ほど寺田委員からの話にありました LINE 等で広げていくのが一つの手段かなと思います。ちなみに、LINE を発信できるのは、Topic や市民公益活動支援センターになるのではないかなと思います。

事務局： 今後、富田林市も LINE を使って、情報発信していくという流れがありそうです。ただ、若者がその LINE に登録してくれるかという問題はあるかとは思いますが、そういった新たな取り組みが始まるかもしれません。

久議長： うちの学生たちと話をしていると、フェイスブック、ツイッター、インスタグラムの道具を使い分けています。ツイッターやインスタグラムは、ハッシュタグで検索できるので、自分が知らない人とつながれるという道具です。誰にどう情報発信するかというのは、ツールの属性を見極めて情報発信していく必要があるのではないかなと思います。私も都市計画に携わってきて感じるのは、ニュータウンの中には、市民活動団体が活動したい時に、気軽に借りられる値段の場所や施設がない。ところが、街中には、安いアパートがあったりして、月数万で借りることができる。そういう意味では、街中は、いろいろな形で自由活動が展開できるようになっている。一方ニュータウンは、しっかり作ったがゆえに、結局自分たちが活動しようと思った時に、そういうスペースが計画的にとれていないという辛さがある。どうしても行政が何かを動かして変えていかないと、活性化していかないとところがニュータウンの辛い所かなと思います。今後は、エコールロゼなどのショッピングモールみたいな所とうまくタイアップしながら、若い人たちが集えるスペースを提供してもらえるようにしていくなどの検討が必要ではと思います。

事務局： 「その他 ①2018Mira-ton の開催 ②市職員研修「会議に上手になろうファシリテーション研修」の開催 ③今後の「富田林市元気なまちづくりモデル事業」について説明



久議長： 市役所の会議をワークショップ的に議論が出来るようにしてほしいなと思います。地域づくりもワークショップが出来るようになると、いろいろな人が意見を発言しやすくなり、自分の声が反映された事業には責任を持つようになる。そうすると、会議の雰囲気が変わって、地域の雰囲気も変わっていきます。そういう意味でも市役所も地域団体も会議のやり方をワークショップ式のボトムアップ型で、みんなで組み上げていくような形に変わっていくことを期待しています。